

LUNCHEON LINGUISTICS 発表要旨

◆2016(平成28)年4月20日

「Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP2016) 報告」

山越康裕(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所准教授)

2016年4月6-9日に香港大学で開催された Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP2016)の概要を報告するとともに以下の発表について紹介した。

・Vijay A. D'Souza (University of Oxford)

Gathering the right stuff. Some reflections on collecting the right language material during documentation

・Nala H. Lee (Stanford University)

The Language Endangerment Index: A Southeast Asian Perspective

・Benjamin Brosig (The Hong Kong Polytechnic University)

Documenting epistemicity in Qinghai Oirat

・Moira Saltzman (University of Michigan)

Jejueo talking dictionary: A collaborative online database for language revitalization

・Ekaterina Gruzdeva, Juha Janhunen (University of Helsinki)

Documentation and revitalization of the Nivkh language on Sakhalin

◆2016(平成28)年4月27日

「ポポロカ語テマラカユカ方言における名詞の生産的複合と語彙的複合」

中本 舜(東京外国語大学外国語学部 南・西アジア課程ウルドゥー語専攻)

ポポロカ語テマラカユカ方言においては、形態音韻論・統語論・意味論的基準によって、基本的には語形成に使われる2種類の名詞複合、「生産的複合」と「語彙的複合」が区別される。形態音韻論的には、前部要素が独自の音韻論的ドメインをなすことを示すような形態音韻論的規則や音素配列論的な制約がある場合生産的複合とみなされる。統語論的には、動詞や句を取ることができる場合生産的複合とみなされる。意味論的には、動物や人間を表す前部要素が必ず生産的複合により複合される。

この2種類の複合を区別することは、語形成研究およびポポロカ語学にそれぞれ意義を持つ。語形成研究においては、これに用いられる形態論的操作である生産的複合が他の言語において関係節によって表される表現の一部を表すことができるという点で語形成と統語論のインターフェイスに関する事例を提供する。また、ポポロカ語学においては、生産的複合に現れる前部要素が語彙的要因のみによって限定されるわけではないことから、Veerman-Leichsenring (2004)

がポポロカ祖語に再建する「名詞類別詞」がポポロカ語テマラカユカ方言において一貫した文法カテゴリーとならず、本研究は Veerman-Leichsenring による同カテゴリーの再建に疑義を投げかけるものであるといえる。

◆2016（平成28）年5月11日

「東・東南アジア諸語における地域的翻訳借用」

倉部慶太（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所/日本学術振興会特別研究員 PD）

本発表では、東・東南アジア諸語の地域的翻訳借用の一例として「日食」と「月食」を取り上げ、当該地域の言語では「食」を表す際に「捕食者+日/月+摂食する」という構造が用いられることが多いことを報告した。同地域の約 100 の言語と方言を対象に調査した結果、次のことが分かった。(a) この構造は当該地域の 80 弱の言語に系統を越えて広く観察される。(b) 捕食者として様々な動物が用いられ、「犬」「虎」「蛙」「蛇」「魚」「ムササビ」「精霊」などが現れる。(c) 摂食動詞として「食べる」または「呑み込む」が用いられる。(d) 「日食」と「月食」で非対称性を示す言語が複数あり、例えばラフ語では「日食」では捕食者として「虎」を用いるが、「月食」では「蛙」を用いる。(e) SOV を基本語順とするチベット・ビルマ諸語は「食」表現では OSV 語順を用いる。

◆2016（平成28）年5月18日

「ラマホロット語における ᳵᳶᳵ 「作る」による動詞連続とその文法化」

長屋尚典（東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師）

ラマホロット語はオーストロネシア語族中央マレー・ポリネシア語派に属し、インドネシア共和国東部のフローレス島で話されている。この言語は、この島の他の言語がそうであるように、孤立的な言語で、動詞連続構文を頻繁に用いる言語である。本発表では、この言語における動詞 ᳵᳶᳵ 「作る」に注目し、この動詞が語彙的動詞から動詞連続構文を介して、使役、道具、同伴者、さらには様態副詞標識、等位接続詞まで用法を拡大していることを、主語との一致や接語代名詞の振る舞いなどを証拠として論じた。

◆2016（平成28）年5月25日

「英語会話の co-construction における話者間の知識・情報の共有」

第十早織（東京外国語大学大学院博士後期課程）

本発表では、英語会話における co-construction を参加者のトピックに関する知識量の観点から分析した。Co-construction とは、話者 B が話者 A の発話を完了させ、ひとつの統語的まとまり

(syntactic gestalt: Auer 1996, Szczeppek 2000) を作り出す現象である。Co-construction には completion type と expansion type の 2 タイプがあると言われている(Ono and Thompson 1995, 1996)。以下が例である。

(1) Carsales3

- 1 G: .. when you say it happens for a reason,
2 .. it's like,
→3 ... () it happened to get you off-
→4 D: .. off my ass.

(Ono and Thompson 1995: 228)

(2) Africa 2

- 1 A: .. actually,
→2 they just went out to<% Chisera= %>,
3 .. to go [out to the river].
→4 B: [which is a hundred miles],
5 in the [2 bush 2].
6 A: [2 it's 2] about a hundred miles away,
7 .. and they w- were just going to go up to the river.

(ibid.: 228)

(1)は completion type の例である。4 行目で話者 D が 3 行目の話者 G の中途半端な発話を完了させている。(2)は expansion type である。話者 B は話者 A のそれだけで意味も統語も完全な発話に要素を付け足して発話を拡張している。

これまでは主に、なぜ co-construction が可能となるのかに焦点があてられてきたが (Ono and Thompson 1995, 1996 など)、実際の会話で何が起きているのかはあまり分析されてこなかった。そこで、本発表では参加者の会話のトピックに関する知識量・情報量の観点から、話者 A と話者 B の知識量の差や、その差がどのように埋め合わされ、co-construction が生じているのかを観察し、記述した。例えば、話者 A の知識量が多い場合、話者 B は確認をするように上昇調イントネーションで不足要素を補完する。一方で、話者 B に知識量が多い場合は、下降調イントネーションで補完する。この場合、ひとつの syntactic gestalt の中でふたつの行為 (Q and A) が生じることが多い。このような supportive な機能が co-construction の典型である。また、典型から逸脱した competitive な機能もある。話者 B はあえて推測しうる話者 A の後続発話と異なる内容を発し、ユーモアや意見の対立を示す。典型である supportive な態度を装って補完することにより、このような機能が生じる。この現象を観察することで参加者のどちらがトピックに関する知識や情報量を多く持っているのか、どちら側の情報について述べられているのかを分析することができる。

また、*expansion type* には話者 B の視点から大きく *clarification* 機能をもつものと *specification* 機能をもつものがあった。前者は話者 A の発話に情報を付け足して、より詳細なものにする役割を果たす。その大多数が下降調イントネーションで付け足されていた。後者のタイプは話者 A の発話に情報を付け足して自分（話者 B）自身の理解を促すものであった。こちらは上昇調イントネーションで付け足されていた。*Completuin type* に比べて、*expansion type* は話者 A によりそった発話 (*supportive*) というより話者 B 自身の視点から付け足される傾向が強かった。

なぜ *co-construction* が生じるのかという疑問には様々な要因が考えられる。まず、相手の発話をしっかりと聞いているからこそ *co-construction* が可能であるという点で、相手との *engagement* を高めることができる。さらには *projectability* の観点から、相手の統語構造を引きついで活用することで参加者が新たな統語構造を算出・処理するための認知的負担を軽減することができ、他の処理（意味論・語用論的解釈など）へとその余力を配分することができるためであると考えられる。

参考文献

- Auer, P. 1996. On the prosody and syntax of turn-continuations. In E. Couper-Kuhlen and M. Selting (eds.), *Prosody in Conversation*. Cambridge: Cambridge University Press. 57-100.
- Ono, T. and Thompson, S. A. (1995). What Can Conversation Tell Us about Syntax? in P. W. Davis (ed.), *Alternative Linguistics: Descriptive and Theoretical Modes*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins. 213-271.
- Ono, T. and Thompson, S. A. (1996). Interaction and Syntax in the Structure of Conversational Discourse: Collaboration, Overlap, and Syntactic Dissociation. in E. H. Hovy and D. R. Scott (eds.), *Computational and Conversational Discourse: Burning Issues — An Interdisciplinary Account*. Berlin: Springer. 67-96.
- Szczepek, B. B. 2000b. Functional aspects of collaborative productions in English conversation. *Interaction and Linguistic Structures* 21: 1-36.
URL: <http://www.inlist.uni-bayreuth.de/issues/21/inlist21.pdf>

◆2016（平成28）年6月1日

「第二回国際モンゴル語学会（於・カルムイク国立大学）報告」

山田洋平（東京外国語大学大学院博士後期課程）

ロシアのカルムイク共和国エリスタにあるカルムイク国立大学にて2016年5月19日～21日の日程で行われた第二回国際モンゴル語学会（II Международной конференций по монгольскому языкознанию / Second International Conference on Mongolic Linguistics）の参加報告を行った。また発表者が学会にて行った口頭発表「ダグール語の条件副動詞」の内容を以下の通り紹介した。

ダグール語の条件副動詞 -AAs 「～すれば」には、所属の形式の付与が義務的である。これは主節と従属節の主語が同一である(再帰)か異なるかを示す指示転換がマークされているものであると言える。こうした義務的な指示転換は他のモンゴル諸語には類を見ず、また周囲のツングース諸語(南グループ: ソロン語、ヘジェン語、マンジュ語)にも見られない。

◆2016(平成28)年6月8日

「日本語学会2016年度春季大会報告」

川村 大(東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授)

学習院大学において5月14・15の両日行われた日本語学会2016年度春季大会について報告した。まず概況を報告し、本学AA研岡田一祐氏のポスター発表があったことなどを紹介した。その後、中俣尚己氏「接続助詞に前接する品詞について—コーパスから見える南モデル—」を取り上げ、やや詳しく紹介した。

◆2016(平成28)年6月15日

「アイルランド語の『完了受動』における動作主人称」

山田怜央(東京外国語大学大学院博士後期課程)

アイルランド語(印欧語族ケルト語派島嶼ケルト語ゴイデリック諸語)には、'be done'のような構造で表される『完了受動』と呼ばれる形式が存在する。ただし『受動』と呼ばれてはいるものの、この形式は典型的な『受動』としての特性を持たないように思われる。

そこで本発表では、この『完了受動』が持つ特性について、動作主人称に着目し、その情報構造の観点から考察をおこなった。具体的には、典型的な『受動』では、1人称動作主の出現頻度がかなり低くなることが予想される。

結果として、アイルランド語の『完了受動』は無標の文と比べて1人称動作主の現れ方に差が見られず、情報構造の点からは全く『受動』らしくないことが明らかになった。

◆2016(平成28)年6月22日

「イディッシュ語とは何語か」

鴨志田聡子(東京外国語大学非常勤講師、東京大学人文社会系研究科研究科研究員、東京大学先端科学技術センター協力研究員)

本発表では、ユダヤ人の言語の一つであるイディッシュ語の歴史や言語的特徴を説明した。イディッシュ語話者たちはこの言語を日常生活で使い、豊かな創作活動をしてきた。しかしこの言語は「死にゆく言語」とも呼ばれている。これは話者が虐殺されたこと、世界各地に移住し拡散したこと、そして各地の言語に同化したことなどによる。とはいえ、ニューヨークやエ

ルサレムを中心に世界中にまだ多くの話者が存在している。イディッシュ語の話者の歴史はこの言語の特徴に反映されている。イディッシュ語は基本的にヘブライ文字で書くので一見ヘブライ語に見えるのだが、ラテン文字で書くとドイツ語に似ている。ドイツ語の影響が強いため借用語が8割程度あり、文法も似ているためだ。とはいえユダヤ人の宗教や伝統に深いかかわりのあるヘブライ語や、ユダヤ人が長年住んだ地域の言語スラブ語からの影響も強い。これらの言語の借用語も多く、文法的な影響も受けている。本発表の最後にユダヤ英語 Yinglish (English の E をとって、Yiddish の Y をつけたもの)を紹介した。発表を通じてユダヤ人の歴史を言語に反映したイディッシュ語は独特な言語だということを解説した。

◆2016 (平成 28) 年 6 月 29 日

「日本語学会第 152 回大会報告」

蔡 熙鏡 (東京外国語大学大学院博士後期課程)

2016 年 6 月 25 日と 26 日に慶應義塾大学三田キャンパスで開催された日本語学会第 152 回大会について報告を行った。報告では、まず大会の概要について説明した後に、報告者が聞いた口頭発表から、倉部慶太氏の「ジンポー語における人称階層に基づく動詞の一致」と山田洋平氏の「モンゴル語の係り結び」の 2 件を選んで、やや詳しく紹介した。

◆2016 (平成 28) 年 7 月 6 日

「国際シンポジウム "Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology" 報告」

小山内優子 (東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー)

2016 年 7 月 2 日 (土) ~ 3 日 (日) に本学アジア・アフリカ言語文化研究所にて、国際シンポジウム "Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology" が開催された。本報告では、まずシンポジウムの全体像を報告したのち、2 日間の発表の中から “Mora and syllable in the pitch accent system of Koshikijima Japanese” (窪菌晴夫国立国語研究所教授) を取り上げ、紹介した。

◆2016 (平成 28) 年 10 月 19 日

「イロカノ語の直示的移動動詞」

山本恭裕 (京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

イロカノ語 (オーストロネシア語族、フィリピン) は空間的直示動詞とされる *ʔay* 「来る」と *pan* 「行く」を持つ。本研究では、映像刺激を用いた描写実験から得たデータにより、この 2 つの動詞の意味的性質を分析した。これら 2 つの動詞の分布を理解するには、(a) 従来の分析で用いられてきた「直示的中心」という概念が、話者のやりとりが関わる機能的な空間として

定義される必要があること、また (b) 語彙化された意味と、推論により生じる語用論的な含意を区別する必要があることを論じた。これにより、(1) ?ay は話者領域（話者によって自身の領域と認識され、物理的な障壁などによって定義される）への移動を表し、一方 (2) pan は語彙的には直示性を持たない要素であり、全般的な移動を表す。また (3) pan は典型的には非話者領域への移動を表すと解釈されるが、これは「より特定のな要素である ?ay が使用されない＝話者領域への移動ではない」という推論から生じる含意であることを論じた。加えて、(4) 2要素の使用頻度は移動者の有生性により差が生じることを報告した。

◆2016（平成28）年10月26日

「フィジー語の接尾辞を伴わない他動詞」

岡本 進（東京外国語大学大学院博士前期課程）

フィジー語の他動詞は動詞語根に他動詞派生接尾辞が付加された形式であるとされてきた。しかしフィジー語の動詞は、他動詞派生接尾辞が付加されていないにもかかわらず、統語的に2つの名詞句（すなわち主語と目的語）が出現しうる場合がある。本研究では、接尾辞が付加されている他動詞を「接尾辞形」、付加されていない他動詞を「ゼロ形」とする。

ゼロ形がすべての動詞で許容されるというわけではないということは従来指摘されてきた。しかし、先行研究では羅列的に例が挙げられているのみである。今回はゼロ形の成立条件を明らかにするため、コンサルタント調査と資料調査を行った。

調査の結果、以下の2点が明らかとなった。まず第一に、ゼロ形は他動性の低い動詞では観察されず、その目的語は典型的には theme である。第二に、接尾辞形は様々な統語環境で実現するのに対し、ゼロ形は主動詞としてよりも補文節内や名詞句として実現する傾向が強い。

◆2016（平成28）年11月9日

「ConCALL 2016 (2nd Bi-Annual Conference on Central Asian Languages and Linguistics)大会報告」

山田洋平（東京外国語大学大学院博士後期課程）

2016年10月7日から9日の日程で行われた ConCALL 2016 (2nd Bi-Annual Conference on Central Asian Languages and Linguistics) の報告を行った。大会はアメリカ・インディアナ州ブルーミントンのインディアナ大学で行われた。

◆2016（平成28）年11月30日

「自然談話における宮古島池間方言の nyaan について—使用頻度に基づく意味機能拡張の仮説—」

呉 唯（東京外国語大学大学院博士前期課程）

池間方言における補助動詞 *myaan* には、「完了」のアスペク的な意味に加えて、日本語標準語の「～てしまう」と類似する機能——「非実現バイアス」(実現しなかった方がいいという話者の評価)がある。先行研究では、「腐る」のような「ものの正常な機能の消失」を表す「準消失動詞」と組み合わせることが *myaan* 意味拡張の動機とされたが、調査した談話データでは合計 70 例の中に「準消失動詞」が 2 例しかない。

そして、本発表では、「話者が動作主と一致しない場合に多用されること」が「非実現バイアス」が生じた主な要因であると主張する。興味深いのは、梁井(2009)によると、日本語の「～てしまう」は話者と動作主が一致しない例が多く、それが動機となりマイナスの感情・評価的意味が焼き付けられた。この言語事実は、まさに *myaan* の「非出現バイアス」の表出と平行的に捉えられる。

◆2016 (平成 28) 年 12 月 7 日

「第 153 回日本言語学会大会報告」

橋本直樹 (東京外国語大学大学院博士前期課程)

2016 年 12 月 3, 4 日に福岡大学で行われた日本言語学会の報告を行った。まず大会の概要について説明した後に、ディリック・セバル氏 (岡山大学大学院) の口頭発表「トルコ語における存在表現の文法化」を取り上げ、発表の概略を報告した。

◆2016 (平成 28) 年 12 月 14 日

「日本語学会 2016 年度秋季大会報告」

川村 大 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)

山形大学において 10 月 29・30 の両日行われた日本語学会 2016 年度秋季大会について報告した。まず概況を報告し、本学 AA 研岡田一祐氏が大会発表賞 (春季大会のポスター発表による) を受賞したことなどを紹介した。また、三宅俊浩氏「近世上方における可能動詞の展開」についてやや詳しく紹介したほか、いくつかの発表の概要を紹介した。

※本報告は平成 28 年度学術研究助成基金助成金 (課題番号 16K02720) による成果の一部である。

◆2017 (平成 29) 年 1 月 18 日

「現代ドイツ語における対格の相関詞 es」

井坂ゆかり (東京外国語大学大学院博士前期課程)

相関詞 es は、現代ドイツ語の 3 人称中性単数の代名詞 es の用法のひとつで、対格の場合、母

文に現れ、後置された目的語文を予告する。対格の相関詞 *es* が現れるかどうかは、一般的に動詞によると説明され、相関詞を通常伴う動詞・任意に伴う動詞・通常伴わない動詞といった分類がなされる。では、相関詞 *es* が任意の動詞については、実際どのような場合に相関詞 *es* が現れるのだろうか。本研究では動詞 *bedauern*（残念に思う）を例にコーパス調査を行い、相関詞 *es* の出現率が目的語文の種類によって異なっていることを明らかにした。このような出現率の差には、動詞の事実性と目的語文の仮想性／現実性が関連していると考えられる。